

音楽アウトリーチ研究の現在  
—活動が抱える課題の分析と今後の方策—

Current music outreach research in Japan :  
Analysis of activities and its challenge based on research results

永島 茜

NAGASHIMA, Akane

武庫川女子大学 学校教育センター紀要

第6号 2021年

【研究報告】

音楽アウトリーチ研究の現在  
—活動が抱える課題の分析と今後の方策—

Current music outreach research in Japan :  
Analysis of activities and its challenge based on research results

永島 茜\*

NAGASHIMA, Akane\*

要旨

音楽アウトリーチ活動は、1990年代末からオーケストラやNPO法人などの音楽団体が中心となって学校などコンサートホール以外の場で実践されてきた。それから約20年を経て、現在では活動が定着しつつあることに伴って研究成果も蓄積されている。本研究では、まずアウトリーチ活動が音楽活動を行う主体が抱える課題や社会的課題を解決する方策として期待されていることを指摘し、つぎに同活動に関する研究を分析した。それらを分類すると、①より望ましい内容の検討（授業、継続性など）、②社会的課題（地域貢献/活性、社会教育など）、③各主体間の連携・協働、④キャリア教育の4つの課題が明らかとなった。これに対してフランスにおけるDUMIの例を示し、今後の方向性として個々の実践が連携することで、問題や情報を共有すると同時に、社会的な課題に対する音楽の有用性という面から社会サービスとしての音楽の可能性を示すことができるのではないかと提案した。

キーワード：音楽アウトリーチ 音楽科教育 外部講師 アートマネジメント 社会と音楽

はじめに

音楽は誰もが親しめる人間的な活動であり、今日では科学技術の進展によって、いつでもどこでも楽しむことができる。一方で、芸術音楽とされる体系的な西洋音楽は、鑑賞にあたって時に深い理解が求められる。1990年代後半から、幅広い鑑賞者に対する音楽理解を促す試みとして、アメリカで行われてきたアウトリーチ活動が日本にも紹介され、現在までオーケストラやNPO法人などが実践を続けている。音楽アウトリーチ活動が紹介導入されて、およそ20年が経過した今では、一定の定着が認められ研究成果も蓄積されている。

本研究では、音楽に関するアウトリーチ活動に関する研究を対象として、研究全体を見渡して課題を整理分類することで、これから深化の時期にあるアウトリーチ活動の方向性を模索したい。研究の方法としては、国内の音楽アウトリーチに関する研究成果を集めるため、Cinii<sup>1</sup>によって雑誌記事及び博士論文を対象としてキーワード検索を行い、そこから調査研究の性質が無いものを除外した94篇を分析対象とした。これらを手に入れたものとできなかったものに分け、入手できたものについては内容を検討し、入手できなかったものも研究題目をフリー・ソフトウェア「KH Coder 3」<sup>2</sup>を用いてテキストマイニングを行うことで研究の傾向を分析した。本研究の構成は次の通りである。

はじめに、音楽アウトリーチ活動に関係する主体とそれらが抱える課題とその解決のための期待という観点から、日本におけるアウトリーチの実践を概観する。そして予備的調査として現在の大学生が、大学までにどの程度アウトリーチ活動に接してきたかを調査する。その後は調査した論考に対して分析する。それらの課題に対し、ティーチングアシスタントなど既に紹介されている方策以外の例

\* 応用音楽学科准教授

としてフランスの DUMI (Diplôme d'État Universitaire de Musicien Intervenant) に触れる。最後にこれからの音楽アウトリーチ活動に付加できる価値として音楽の社会的意義や、社会サービスとしての音楽の可能性を模索する。

## 1. 音楽アウトリーチ活動への期待

アウトリーチ (outreach) 活動は、英語で「外に手を伸ばす、より遠くに届ける」というもとの意味から、主に米国の使用法として「①出先機関；(援助が必要な人の所への) 出張, 派遣, 積極的救済。② (教会外の人への) 説教, 奉仕活動。」<sup>3</sup>と説明されている。音楽のアウトリーチを対象として日本初の博士号を取得した林睦氏によると「もともとは福祉や宗教の分野でよくつかわれる言葉で、例えば非識字者への教育的な支援活動であるとか、改宗のための教化・教育などという意味でつかわれる」<sup>4</sup>言葉である。特に社会福祉の分野では「クライアントの表明されないニーズ把握の手法」<sup>5</sup>として開発されたものとされる。その要点は、対象者 (クライアント) からの自発的な参加や発信を待つのではなく、支援・サービスを提供する行政や組織が対象者のいるところへ出向く「積極的救済」である。その考え方が芸術文化の分野においても支持されたのである。

なぜなら、芸術に触れるには美術館やコンサートなど芸術のある場に出向かなければならず、更に時間やお金も制約される。そうすると、十分な生活能力があるとしても芸術を享受したいという気持ちだけでは解決できない。子どもなどは、生活の中心が学校と家庭であるため、学校以外では家庭の意向に大きく左右される。また障がいのある環境 (本人・家族・支援者) では、移動などの物理的な面のみならず芸術鑑賞の約束事に対して馴染みにくいとの考えを持つ場合もあるだろう。

他方、美術館・劇場/音楽堂 (コンサートホール)・芸術団体・アーティスト個人など芸術を提供する主体は、活動の広報・普及、潜在的ニーズの把握、発表機会の増加や観客と交流で得られる活動内容の向上などを求めている。こうしてアウトリーチ活動は、芸術活動を構成する受け手と送り手の抱える課題を解決できる可能性のある活動として 2000 年初頭に本格的に紹介されてから次第に広まった。現在では芸術アウトリーチ事業を導入する自治体も存在するなど、一定の定着が見られる。ここで音楽アウトリーチに焦点を絞り、関係する主体とそれらが抱える課題を整理する。

### 1-1. 音楽アウトリーチ活動に関係する主体とその課題

音楽に関連する領域は表舞台に立つ演奏家だけでなく、音楽教育 (教科教育, 専門教育, 生涯学習・社会教育), アートマネジメント (芸術経営), 音楽療法, 楽器制作修理, 音響関係, イベント・コンテンツなどの音楽産業, 音楽ツーリズムなどの観光等に至るまで幅広く存在する。本研究では、アウトリーチ活動に関する論考を調査検討する過程で、アウトリーチ活動ととくに深く関係すると考えられる主体について、実施・提供側と利用・受入側に分けてどのような課題を抱えているのかを検討した。そこから実施・提供側は①活動の認知向上・広報, ②専門性の維持向上, ③地域社会との連携が主な課題であり、利用・受け入れ側は①鑑賞機会の確保, ②地域社会との連携がそれぞれで共通する課題として挙げられる。

表 1. 音楽アウトリーチ活動に関係する主体とその課題

音楽アウトリーチ活動に関係する主体		課題
実施提供する主体	劇場/音楽堂（コンサートホール）	地域の芸術拠点としての認知向上，普及・教育，顧客創造・顧客ニーズの把握，アーティストの育成，コーディネート機能
	実演団体（オーケストラ・オペラなど）	活動の認知・広報，普及・教育，顧客創造・顧客ニーズの把握，専門性の追究，地域社会との連携
	音楽家（個人）	専門性の維持向上，発表機会の確保，顧客ニーズの把握，
	大学（教員，演奏家，音楽関係の専門職養成）	実習を含む教育，音楽家としてのキャリア教育，地域社会との連携
	行政	文化行政として市民に対する鑑賞機会の提供
	企業メセナ	社会（地域）貢献，企業の認知・広報
	団体（アウトリーチ活動を行う NPO 法人，社団法人など）	子ども，高齢者，障がい者などの支援，コーディネート
利用・受け入れ主体	学校	教諭の専門以外も含む多彩な生演奏の鑑賞，芸術活動への参加，部活動・クラブ活動の指導，地域社会との連携
	福祉施設・病院	音楽鑑賞機会，音楽によるケア，症状緩和，地域社会との連携

### 1-2. 社会的課題と音楽アウトリーチ

もうひとつ重要な視点は、芸術文化（音楽）が果たす社会的課題への役割である。実施・提供主体である劇場・ホールや実演団体は、専門的な職能を有する集団として経営される一方で、芸術文化が社会に果たす役割に鑑みて公益性を認定されたり助成を受けたりしている。文化政策として、芸術文化そのものの振興、文化財保護、アクセス機会の確保等に加え、教育・まちづくり・福祉・国際交流等の関連領域における社会的課題に対応する社会サービスとしての役割についても留意する必要がある。

### 1-3. 日本におけるアウトリーチ活動の始まり

芸術文化のアウトリーチ活動は、1998 年ごろからその理念や主にアメリカにおける事例が紹介され始め、関係団体・音楽家からの支持を得て主に学校において試行、実践されていった。2001 年には文化芸術振興基本法（現「文化芸術基本法」）も施行され、実演団体や音楽家が学校に関わる機運を後押しした。具体的な実践事例として、(財)地域創造による「公共ホール音楽活性化事業（通称おんかつ）」、オーケストラ・オペラ団体、NPO 法人、大学など提供側に加え、林睦氏の調査<sup>6</sup>によると学校（小・中・高）でも音楽家・地域の文化を担う人材を招いた経験は 69.6%あり、それが「アウトリーチ活動」の考え方であるかどうかは別として、実態として外部の人材が学校に関わることは行われていたことが窺える。こうした個別の実践を背景として「アウトリーチ活動」という概念が提唱されたため、課題解決の方策として期待され、実践事例の増加並びに研究対象として注目されるようになったと考えられる。音楽アウトリーチ活動を対象とする研究は、2001 年ごろから発表されはじめ、2003 年には前出の通り林睦氏が、大阪大学より博士号を授与されている。

## 2. 音楽アウトリーチ活動の普及と定着に関する予備的調査

### ：音楽学部生におけるこれまでのアウトリーチ授業を受けた経験

音楽アウトリーチ活動の事例が散見されるようになってから概ね 20 年経つ。そこで予備的な調査として、本学音楽学部 4 年生 49 名に対して、大学までに受けた音楽アウトリーチ（特別授業）についてアンケートへの協力を依頼した。Google form を利用し 14 名（応用音楽学科 7 名/演奏学科 7 名）から回答を得た（有効回答率 28.6%）。2020 年 9 月 4 日～12 日の間は回答可能とした。質問内容と回答は下記の通りである。なお、実際に使用したフォームは参考資料として文末に付す。

表 2. 大学までの音楽の特別授業について

	なし	1 回	1～3 回	4 回以上	不明(覚えていない)
幼稚園/保育園	5	1	3	2	3
小学校 1～3 年	3	2	4	2	3
小学校 4～6 年	2	3	3	4	2
中学校		5	5	4	
高校	2	1	7	4	

表 3. 実施場所（回答必須）

	音楽室	体育館/講堂	教室（ホームルーム）	劇場・ホールへ出向 いた	不明・覚えていない
幼稚園/保育園	2	2	2	1	7
小学校 1～3 年	3	2	1	2	6
小学校 4～6 年	3	2	1	4	4
中学校	4	2		8	
高校	3		1	8	2

表 4. 鑑賞した音楽ジャンル（主に鑑賞したもの）（回答必須）

	声楽・合 唱（クラシッ ク）	ピアノ ソロ （クラシッ ク）	弦楽器（ク ラシック/ポ ・室内 楽）	管楽器（ク ラシック/ポ 室内 楽）	邦 楽	ジャズ, 民族音 楽	ポピュ ラー音 楽	様々な 音楽の 複合	その他	不明・覚 えてい ない
幼稚園/保 育園	1	3	1						1	8
小学校 1～ 3 年	1	3		2				1		7
小学校 4～ 6 年	1	3		3				2		5
中学校	2	2		4	1			2	2	1
高校	1	2	2		1	1		4		3

表5. 生徒が参加できる場面の有無（回答必須）

	鑑賞のみ	一緒に楽曲を演奏した	希望者は楽器などに触れた	全員が楽器などに触れた	不明・覚えていない
幼稚園/保育園	4	1	1	8	
小学校1～3年	3		2	2	7
小学校4～6年	3		4	3	4
中学校	6	1	5	1	1
高校	6	2	2	1	3

表6. 楽しかったところ（回答必須）

	プロの生演奏や迫力、音色に触れられた	知っている曲を演奏してくれた	一緒に演奏したり参加できたこと	いつもと違う雰囲気	特になし	不明・覚えていない
幼稚園/保育園		3		3	1	7
小学校1～3年	1	3		3	1	6
小学校4～6年	4	2	1	2		4
中学校	9		3	1	1	
高校	6		2	2	2	2

表7. 特別授業と現在の音楽活動（音楽学部への入学含む）との関わり

	なし		自分で音楽を聴くようになった		コンサート等に行ってみた		音楽系の習い事を始めた		音楽系の部活に入った		音楽学部への進学を決めた	
	応用	演奏	応用	演奏	応用	演奏	応用	演奏	応用	演奏	応用	演奏
幼稚園/保育園	2	3	1				4	3				
小学校1～3年	4	3	2	2	1			1				
小学校4～6年	2	3	2	1	2	1		1	1			1
中学校	1	2	3		2	1		1			1	3
高校	1	2	2	1	2						1	4

備考：必須回答ではないことと、各段階で同じ選択をしている場合があるため合計数とは一致しない。

今回は回答率も低いため、予備的調査として位置づけているが、全員が音楽の特別授業を大学までに経験しており、就学前の記憶が残っており音楽系の習い事に結びついたこと、音楽学部への進学にも関与している場合があること、中学で「劇場・ホールに出向いた」が多いのは、本学の立地から兵

兵庫県立芸術文化センター管弦楽団が実施する「わくわくオーケストラ教室」への参加が関わっていると考えられる。

### 3. アウトリーチ研究の動向

アウトリーチ活動を対象とした研究について分析を行う。本研究では、論文検索サイト Cinii を用いキーワードとして「音楽 アウトリーチ」で論文検索を行い、更に博士論文で「アウトリーチ」を含むものを対象とした。検出された 108 件中、タイトル及びキーワードにアウトリーチを含まないものや音楽以外を主研究とするもの、通信紙など研究の性質を帯びないものを除外した 91 篇及び博士論文 3 件の 94 篇を分析対象とした。分析に当たっては、95 件の書誌情報をエクセルシートに入力しそれを基礎データとして用いた。それらを更に実際に論文を入手し内容を検討できた 57 篇と入手できなかった 38 篇に分けた。

まず全体像をつかむために年別、著者別の論文数、特集号などを探り、テキストマイニングのためのフリー・ソフトウェア「KH Coder 3」を用いて論題の頻出語、論題からの共起関係を探った。

#### 3-1. 年別、著者別の論文数など

Cinii に登録されている論文のうち初出は 2001 年で、2003 年に一旦増加したのち 2008 年までは横ばいで、2009 年から増加した状態を保っている。2003 年には財地域創造が発行する『地域創造』街づくりとの関係から特集号が組まれたこと、2013 年には日本音楽教育学会の『音楽教育実践ジャーナル』でアウトリーチ特集が組まれたことで、論文数が一時的に増加している。

日本音楽教育学会が特集を組んだことは音楽科教育の現場に対してアウトリーチの可能性を示している。著者別では、梶田美香氏の 6 篇、林睦氏の 4 篇に続き高橋千絵氏、壬生千恵子氏と吉本光宏氏が各 3 篇著しており、梶田氏（2011 年）と林氏（2003 年）は博士号を取得している。林氏の研究は、日本において音楽アウトリーチ活動を学術的な研究対象として位置づけた初めての成果と言えよう。

表 8. 音楽アウトリーチに関する年別論文数

論文数	1	0	6	1	2	1	1	1	7	6	7	6	13	3	12	9	5	7	6
特集号を一篇とした数	1	0	4	1	2	1	1	1	6	6	7	6	5	3	12	9	5	7	6
発表年	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019

#### 3-2. 論題に見る頻出語とその共起関係

KH Coder 3 を用いて論題を対象として頻出語を抽出し、そこから各語の共起関係を探った。頻出語については、対象とする論題が 94 編で少ないため出現回数は 2 回までとした。抽出にあたりひとつの単語として抽出できなかったものを、「アウトリーチ、アーティスト、音楽科、鑑賞、実践、コンサート、コミュニケーション、コラボレーション、修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチ、事例、演奏、ワークショップ」を強制抽出する語に指定した。使用しない語については、意味を持たないのに抽出された語や記号を省いた。それらを集計したのが右表である。上位に「教育、実践、学校、小学校、授業」など教育関連の語が並ぶ中で「可能」が入っており、アウトリーチへの期待が窺われる。

表9. 研究題目における頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
アウトリーチ	82	活性	3	東京	2
音楽	72	継続	3	動向	2
活動	40	見る	3	日本	2
教育	27	現場	3	聞き取る	2
実践	22	公共	3	保育	2
学校	17	高等	3	保育園	2
可能	14	施設	3	方法	2
事例	13	視点	3	訪問	2
授業	13	取り組み	3	目指す	2
小学校	13	調査	3	幼児	2
演奏	12	変容	3	要領	2
考察	12	役割	3		
地域	12	アーティスト	2		
音楽科	11	カリキュラム	2		
教員	9	クラシック	2		
連携	9	コミュニケーション	2		
課題	8	サービス	2		
芸術	8	テーマ	2		
研究	8	フェスティバル	2		
社会	8	マネジメント	2		
大学	8	ワークショップ	2		
中心	8	学び	2		
コンサート	7	学習	2		
鑑賞	7	活用	2		
表現	7	関係	2		
養成	7	企画	2		
試み	6	教室	2		
ホール	5	経験	2		
意義	5	検討	2		
音楽家	5	研修	2		
効果	5	交響楽	2		
子ども	5	公民館	2		
支援	5	考える	2		
事業	5	行う	2		
文化	5	貢献	2		
科学	4	参加	2		
学部	4	資源	2		
関わり	4	実演	2		
市民	4	実際	2		
指導	4	取り入れる	2		
特別	4	修正版クラウンテッド・セオリー・アプローチ	2		
年間	4	新た	2		
報告	4	成果	2		
幼稚園	4	奏者	2		
用いる	4	体験	2		
コラボレーション	3	対象	2		
プロジェクト	3	知的	2		
課程	3	長崎	2		
学ぶ	3	展望	2		
学生	3	伝統	2		

つぎにこれらの頻出語の共起関係をネットワーク図にした。表示上で見やすくするため「共起関係 (edge) の選択は係数 0.2 以上とし、強い共起関係ほど濃い線になる設定にした。これらから、アウトリーチ活動が教育や実践と共起関係にあり、そこから学校、音楽家、連携など教育分野と馴染みやすいことが分かる。そして、企画、資源、活用、現場、フェスティバルなどは公共ホール、アーティストなどアーツマネジメント分野と共起している。また地域、文化は、役割、芸術、社会などと共起しており、これらまちづくりや地域振興からの関心が示唆される。

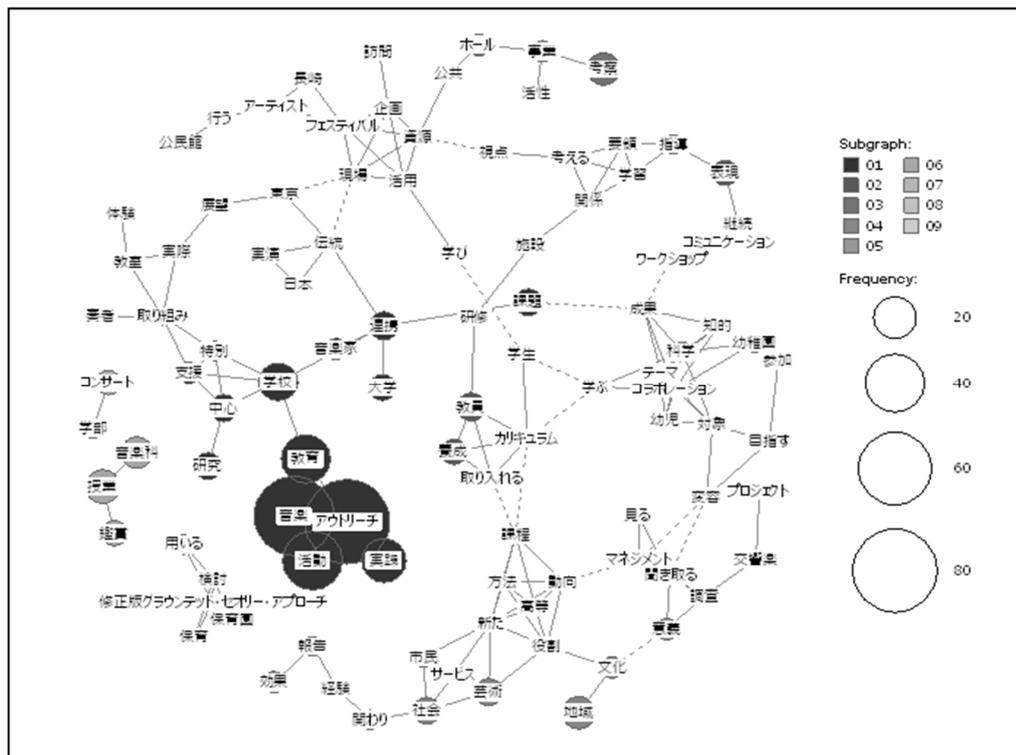


図1. 研究題目の共起ネットワーク図

### 3-3. 内容の傾向

つぎに入手できた 57 件を対象として、①著者（主に第一著者）の研究へのかかわり方、②課題、③特色（研究方法、ジャンルなど）として特筆すべきものを以下にまとめた。実践事例を検討する場合、研究者自らが実践に関わっているかどうかで、活動の提供側なのか受入側なのかを留意する必要がある。なお、研究者が実践に関わっている場合でも分析対象は生徒など受け入れ側である場合も存在するため、必ずしも分析対象は提供側とは限らない。またこれら蓄積された研究成果における課題を集めることで、アウトリーチ活動に共通する課題を明らかにできる。備考については、分析方法や特に定められた観点、実践における特記事項を記入した。

#### ①著者の研究へのかかわり方

著者自ら実践を実施/指導が 33 件 (57.9%)、参与観察・フィールド調査を含め自ら以外の実践を分析が 17 件(29.8%)、文献研究 4 件 (7.0%)、受入側として参与 3 件 (5.2%) であり、入手できた研究の範囲ではあるものの著者自らが実践を実施したり指導者として関わったりしているものが過半数を占め、次いで研究者以外の実践を分析するものがある。そして、文献研究と受入側としての実践は少ないことが分かる（四捨五入しているため 100%にはならない）。これらから音楽アウトリーチ活動は、研究においても実践が主体である一方で受入側からの研究が少ないことと、文献を主体とする研究が少ないことが明らかとなった。更に、アウトリーチ事業を行う行政や法人機関による研究は見当たらず、各機関で事業報告が行われていると考えられる。

#### ②課題

それぞれの論考における具体的課題は細分化される。例えば学校と地域の連携、教諭と音楽家の連携・協働、教育現場との連携などが挙げられる。更にそれらを下記 a~d の 4 つに集約し、次のような結果が得られた。a.より望ましい内容の検討（授業、継続性など）／21 篇 36.8%、b.社会的課題（地域貢献/活性、社会教育など）／15 篇 26.3%、c.各主体間の連携・協働／12 篇 21.1%、d.キャリア教育／11 篇 19.3%となった<sup>7</sup>。

#### ③特色

実践のうち利用・受入側からの研究は 4 篇しかなく、とくに松原美保氏（整理番号 73）の「子ども、教諭、ゲスト」の関係や渡会純一氏（整理番号 94）の外部講師と顧問教員の関係は、提供側からは感知しにくい指摘である。内容の検討やキャリア教育に関連する手法として、教育哲学、ピーチングの 3 つの目標、ティーチング・アーティスト（TA）の考え方を取り入れたもの、分析方法として修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いたものなど、確立されつつある考え方や方法に則った分析検討は、アウトリーチ研究の深化に寄与すると考えられる。

以上から、アウトリーチ活動に関する研究は実践の積み重ねが中心となっており、1-1.で検討した各主体が抱える課題とそれぞれの研究成果から導かれた課題を照合すると、依然として課題となっている。今後は課題に焦点を当てた実践や研究の蓄積によって、課題解決の方策としてアウトリーチ活動に対する信頼支持が一層得られるだろう。

### 4. アウトリーチ活動における課題への示唆—フランスの DUMI の例—

アウトリーチ活動に関する課題として、a.より望ましい内容の検討（授業、継続性など）、b.社会的

課題（地域貢献/活性，社会教育など），c.各主体間の連携・協働，d.キャリア教育が見出された。昨今，これらを解決できる資質として，エリック・ブース氏が提唱するティーチング・アーティスト（TA）<sup>8</sup>やオーケストラの普及教育部門の設置などが注目されているが，フランスのDUMIについても触れておきたい。

筆者は，フランスの音楽教育・文化政策を調査する過程でこの国家資格についても関心を抱き，その養成内容や活動を追っている。音楽家はその専門性を活かしながら，子どもをはじめとする生徒に「音楽」を発見させる段階から創造性を引き出すことを重視して教える専門職として指導に当たっているのである。音楽面だけではなく，実施先（学校や音楽学校，地域の劇場など）の教諭やスタッフとの協働が必須となっていることも特色である。

国家資格であるため，その養成についても音楽家のキャリア教育として，カリキュラムが確立されている。アウトリーチ活動をめぐる課題では，内容，連携，キャリア教育に加え，地域貢献など社会的課題への対応も挙げられているが，現状では実践時においてこれらに対応できる資質のある音楽家や指導者の個人的資質に頼らざるを得ない面もある。しかしながら，フランスにおけるDUMI取得に当たっては，大学に付設された専門的な養成センターで，2年間（3年間のプログラムもある）で合計1500時間の理論及び実習が課されるため，資格取得時には専門職として即時に活動できるのである。カリキュラムなど詳細は別稿<sup>9</sup>を参照されたいが，養成センター入学する以前の音楽家としての活動基盤に追加して関係する理論を学び実習を重ねるため，資格取得時には活動内容だけではなく，実施先の教諭や関係者との協働能力など含めた即戦力を兼ね備えているのである。日本に全く同様の取り組みを導入することは難しいが，アウトリーチ活動の課題解決に対して有用な示唆に富んでいる。

## おわりに

本研究を通じて音楽アウトリーチ活動の全体像を展望すると，まず日本に紹介されてから約20年にわたり実践・研究が継続しているのは，現場レベルでは有用性が実感されているからと考えられる。今後は，日本の状況に適應させながら今回の研究で明らかとなった課題に対して，例えば個々の実践が連携してアウトリーチ活動全体で長期的な視野に立った展望を共有することも一案と考えられる。

個々の実践では参加者の変容が重視されるが，それらの実践が連携し効果的な方法や課題を共有すれば，より大きな目標として社会的課題の解決という視点から，社会サービスとしての音楽の可能性を付加できるかもしれない。その際には，①利用・受け入れ側からのより積極的な発言を促し，提供側（組織・音楽家），利用側（組織・参加者）が対等に参与できる方法を日本の実情を考慮して探ること，②日本で既に行われている実践やアメリカのTAの活動，フランスのDUMIなど各種事例を参考に人材育成プログラムを考案すること，③社会サービスとしての観点から音楽の可能性を見つめることを主軸に据えることが望ましい。更に数篇の研究で行われているように，実践の分析・評価についても何らかの評価軸を設定し指標とすることや，質的・量的研究の手法を活用することでより客観的な視点が得られるものと考えられる。

表10. 分析対象となった文献

整理番号	著者	論題	掲載誌	関わり方	具体的課題と分類	特色	有無
1	赤羽美希	地域音楽活動の推進についてーうたの住む家プロジェクトの活動を中心に	『音楽芸術マネジメント』(8),2016,pp.85-91.				無
2	新井香美、木下大輔	教員養成課程カリキュラムに取り入れた音楽アウトリーチ活動ー宇都宮大学教育学部音楽教育専攻の実践例ー	『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第36号,2013,pp.17-23.	実践/指導で参加	キャリア教育	c	有
3	荒川恵子、内田博世、豊田典子、谷口高士	幼稚園における演奏会で科学を学ぶー動物の翼からいのちと地球の不思議を学ぶ音楽と科学のコラボレーションによるアウトリーチ活動の試みー	『京都女子大学発達教育学部紀要』第12号,2016,pp.59-68.	実践/指導で参加	より望ましい内容の開発	a	有
4	荒川恵子、豊田典子、岡林典子、豊田秀雄他	幼児を対象とした音楽と科学のコラボレーションによるアウトリーチ活動の可能性ー和楽器・天体・気象をテーマとしてー	『京都女子大学発達教育学部紀要』(11),2015,pp.71-80.	実践/指導で参加	より望ましい内容の開発	a	有
5	石川裕司、福島達雄	保育園における音楽アウトリーチ活動と園のニーズへの対応ー保育者へのインタビューからー	『東京学芸大学紀要芸術・スポーツ学系』(71),2019,pp.1-12.	他事例	利用者のニーズ把握	a	有
6	伊志強絵里子	小学校における音楽アウトリーチの有用性についてー『学習指導要領』における観点から	『音楽芸術マネジメント』(10),pp.65-76.	他事例	子どもの視点から有用性の検証	a	追跡調査
7	市川恵、佐野靖	地域と大学の連携によるワークショップの成果と課題ー青森県「アートスクール」を事例としてー	『音楽芸術マネジメント』(10),2018,pp.87-94.				無
8	井出詩織、窪田裕美、声川紀子	現場レポート 地域文化資源を活用した企画の意義と可能性ー糸島市誕生記念式典『異郷(いと)ジャズフェスティバル』を事例として	『音楽芸術マネジメント』(3),pp.165-176.				無
9	大島綾子	音楽ファンを育てるアウトリーチーヴィオラ奏者デイヴィッド・ワレスー	『ストリング』26(3),2011,pp.18-21.				無
10	岡部裕美、鈴木香代子	学校と演奏家の連携による音楽教育の可能性ー継続的なアウトリーチ活動の事例を辿ってー	『千葉大学教育学部研究紀要』第58巻,2010,pp.109-120.	他事例	教諭と音楽家の連携	b	有
11	岡部裕美	子育て支援としての継続的音楽アウトリーチの可能性(1)ー身体表現活動からコミュニケーション能力の向上へー	『千葉大学教育学部研究紀要』(60巻),202,pp.215-220.	他事例	子育て支援(社会福祉)	d	有
12	小山文加	学校音楽教育とアウトリーチ活動の関係を考えるー学習指導要領を中心にー	『音楽芸術マネジメント』(1),2009,pp.129-135.				無
13	堀内孝美子	オーケストラファン劇におけるアウトリーチ活動の効果ー群馬交響楽団の定期会員調査から	『計画行政』40(2),2017,pp.45-55.				無
14	高橋健治	公開講座「0歳からのコンサートー歌の遊園地ー」ー2年間の取り組みー	『こども教育三仙大学紀要』9(2),2018,pp.95-102.	実践/指導で参加	大学の地域・社会貢献	d	有
15	横田美香	アウトリーチによる音楽鑑賞教育ー1年間の子どもたちの変化ー	『学校音楽教育研究』15(0),2011,pp.210-211.	実践/指導で参加	変容の継続観察	a	教育哲学
16	横田美香	音楽教育哲学から鑑賞教育への示唆(3)	『名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究』(12),2009,pp.151-164.	文献研究	社会全体への効果を示す	d	有
17	横田美香	地域全体を対象にしたアウトリーチを目指してー小学校へのアウトリーチを参観した保護者の実態からー	『音楽芸術マネジメント』(2),2010,pp.99-104.	実践/指導で参加	地域との連携	d	地域への波及
18	横田美香	音楽科におけるアウトリーチの効果ー小学校からの実践報告(4.音楽経験と地域・社会との関わり,川音楽経験と認識)	『学校音楽教育研究日本学校音楽教育実践学会紀要』(14),2010,pp.106-107.				無
19	横田美香	音楽科におけるアウトリーチの効果ー小学校からの実践報告ー	『学校音楽教育研究』(14),2010,pp.215-225.				無
20	横田美香	転換するアウトリーチー音楽科教育への貢献	名古屋市立大学,博士(人間文化),甲第1279号				無
21	横原健二	学校アウトリーチ活動における社会教育行政の取組ー「小学校音楽体験教室」に着目してー	『九州大学大学院人間環境学府(教育学部)教育経営学術研究紀要』(15),2012,pp.133-138.	他事例	社会教育における在り方	d	社会教育行政
22	可児真子、岡ひろみ、林健	打楽器奏者と音楽をつくるアウトリーチ活動ー特別支援学校での取り組みを中心にー	『実践センター紀要』第26巻	実践/指導で参加	子ども、教師、ゲストの関係	b	打楽器
23	神山典士	ホール主導から住民が主人公の事業へサイレント・サポーターの確かな広がりー兵庫県和田山町・生野町/大分県湯布原町TAJIMAクラシックパークvol.2/ゆふいんアート委員会	『地域創造ー町づくりアートを応援します』(14),2003,pp.8-13.				無
24	河島伸子	アウトリーチ再考ーアーツ・マネジメントにおける近年の動向	『都市問題研究』61(10),2009,pp.81-94.				無
25	河添達也、小川彩由子	鑑賞授業における音楽アウトリーチ活動の実践研究	『島根大学教育臨床総合研究』(9),2010,pp.169-178.	実践/指導で参加	より望ましい内容の開発	a	有
26	河添達也	ウィーン交響楽団の教育プロジェクト型アウトリーチー島根県での4者協働方式への採用を試みる	『音楽教育実践ジャーナル』10(2),2013,pp.21-28.	参与観察・フィールド調査	協働	b	オーケストラ
27	菅道子	子どものための参加型音楽プログラムの構成要件ーロンドの理解を目指した音楽のサウンドウィッチをつくるう>を事例としてー	『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』(20),2010,pp.105-113.	実践/指導で参加	より望ましい内容の開発	a	有
28	菅道子、山名敬之	教育学部における総合的な芸術普及活動の授業の試みー初級児童養護学校における参加型音楽コンサート作りを事例としてー	『関西楽理研究』(22),2005,pp.49-63.				無
29	久保田慶一、木下大輔	音楽科大学教員のFD研修と大学の授業改善に関する実践的研究	『日本教育大学協会研究年報』(26),2008,pp.155-167.				無
30	久保田葉子	子供のための学校訪問コンサートー音楽を届けること、音楽を通して伝えることー	『尚美学園大学芸術情報研究』(16),2009,pp.43-54.				無
31	熊澤彩子	音楽科におけるアウトリーチ活動	『筑波大学附属視覚特別支援学校研究紀要』(50),2018,pp.31-35.				無
32	小泉元宏	市民社会との関わりから見た音楽祭研究に向けてー『サイトウ・キネン・フェスティバル松本』における市民社会との関わりを事例としてー	『音楽教育学』39(2),2009,pp.12-24.	参与観察・フィールド調査	市民社会への動きかけ	d	音楽祭





## 注・引用文献

- (1) <https://ci.nii.ac.jp/> (国立情報学研究所) 最終アクセス 2020 年 6 月 30 日。  
なお google scholar (<https://scholar.google.com/>) も参照した。
- (2) 樋口耕一氏が開発したフリー・ソフトウェアで、樋口耕一 『社会調査のための計量テキスト分析 –内容分析の継承と発展を目指して– 第 2 版』ナカニシヤ出版, 2020 年を参照した。
- (3) 井上永幸, 赤野一郎編『ウィズダム英和辞典 (第三版)』三省堂, 2014 年, p.1370.
- (4) 林睦「音楽のアウトリーチ活動に関する研究–音楽家と学校の連携を中心に–」大阪大学, 博士(文学), 甲第 8834 号, 2003 年, p.1.
- (5) 的場康子「アウトリーチ活動の意義・課題についての一考察–現代における芸術文化の社会的役割–」『ライフデザインレポート』(147),2003,p.26.
- (6) 林, 前掲博士論文, p.116.
- (7) ひとつの課題に集約できないものは複数としたため 100%にはならない。
- (8) エリック・ブース (久保田慶一, 大島路子, 大類朋美翻訳) 『ティーチング・アーティスト Teaching Artist: 音楽の世界に導く職業』水曜社, 2016 年。
- (9) 柳澤藍, 森勇, 永島茜「フランスの音楽家に求められる資質と能力–DUMISTE のカリキュラム及び養成内容の実例から–」『学校教育センター年報』(4),2019,pp.23-36.

## 【資料】

### 大学までに受けた音楽の特別授業（アウトリーチ）について

4年生の皆さん

大学入学までに受けた音楽の特別授業（アウトリーチ）について調査しています。回答に氏名や個人の特定につながる情報は不要です（所要時間約5分）。本調査によって得られた内容や情報は研究のみに使用します。途中で回答をやめることもできます。了承できる場合は、9/8（火）17時までに回答してください。

※音楽の特別授業は、「アウトリーチ活動」とも呼ばれますが、学校に外部の音楽家に来て演奏や説明を聞いたり、体験したりする活動を示します。学校を出てホールなどでコンサート鑑賞する場合も含まれます。

\*必須

#### 1. 所属学科\*

1つだけマークしてください。

- 演奏学科  
 応用音楽学科

#### 2. 大学までの音楽の特別授業について\*

1行につき1つだけマークしてください。

	なし	1回	1から3回	4回以上	不明（覚えていない）
幼稚園／保育園	<input type="radio"/>				
小学校1～3年	<input type="radio"/>				
小学校4～6年	<input type="radio"/>				
中学校	<input type="radio"/>				
高校	<input type="radio"/>				

#### 5. 生徒が参加できる場面の有無\*

1行につき1つだけマークしてください。

	鑑賞のみ	一緒に楽曲を演奏した	希望者は楽器などに触れた	全員が楽器などに触れた	不明・覚えていない
幼稚園／保育園	<input type="radio"/>				
小学校1～3年	<input type="radio"/>				
小学校4～6年	<input type="radio"/>				
中学校	<input type="radio"/>				
高校	<input type="radio"/>				

#### 6. 楽しかったところ

1行につき1つだけマークしてください。

	プロの生演奏や迫力、音色に触れられた	知っている曲を演奏してくれた	一緒に演奏したり参加できたこと	いつもと違う雰囲気	特になし	不明・覚えていない
幼稚園／保育園	<input type="radio"/>					
小学校1～3年	<input type="radio"/>					
小学校4～6年	<input type="radio"/>					
中学校	<input type="radio"/>					
高校	<input type="radio"/>					

#### 3. 実施場所\*

1行につき1つだけマークしてください。

	音楽室	体育館／講堂	教室（ホームルーム）	劇場・ホールへ出向いた	不明・覚えていない
幼稚園／保育園	<input type="radio"/>				
小学校1～3年	<input type="radio"/>				
小学校4～6年	<input type="radio"/>				
中学校	<input type="radio"/>				
高校	<input type="radio"/>				

#### 4. 鑑賞した音楽ジャンル（主に鑑賞したもの）\*

1行につき1つだけマークしてください。

	声楽・合唱（クラシック）	ピアノソロ（クラシック）	弦楽器（クラシック） （ヴァイオリン・室内楽）	管楽器（クラシック） （フルート・室内楽）	邦楽	ジャズ、民族音楽	ポピュラー音楽	様々な音楽の複合	その他
幼稚園／保育園	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
小学校1～3年	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
小学校4～6年	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
中学校	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
高校	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

#### 7. 特別授業と現在の音楽活動（音楽学部への入学含む）との関わり

1行につき1つだけマークしてください。

	なし	自分で音楽を聴くようになった	コンサート等に行ってみた	音楽系の習い事を始めた	音楽系の部活に入った	音楽学部への進学を決めた
幼稚園／保育園	<input type="radio"/>					
小学校1～3年	<input type="radio"/>					
小学校4～6年	<input type="radio"/>					
中学校	<input type="radio"/>					
高校	<input type="radio"/>					

#### 8. 印象に残っていることがあれば教えてください。質問は以上です。ご協力ありがとうございます。

---



---